

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです

「結果がすべて」と考える人 「努力」に満足する二流、「成果」に満足する一流

ビジネスである以上、結果がすべてなのは当然のことです。

一方で、プロセスを大事にしていれば間違いなく結果は出るので。

つまり、結果がすべてと考えることと、プロセスを大事にすることは、関係のない話ではありません。プロセスをないがしろにして、いい結果を出すことはできません。

ただし、「やることはやったのだから、結果が出なくても評価してほしい」と考えるのは間違っています。なぜなら、本来、「やることはやった=正しいプロセスを踏んだ」のなら、結果が出ていなければおかしいからです。

結果につながらなかったなら、プロセスのどこかに問題があったと考えるのが自然であり、プロセスそのものが正しくなかったのであるなら、いかに努力をしたにせよ、決して評価されるべきではありません。会社は何のためにあるのか。単純に言えば、利益を上げるためです。社会的な貢献をするためだとする向きもありますが、そもそも利益を上げなければ社会への貢献などできないでしょう。そして、利益を上げるために、ひいては社会に貢献するためには、とにかく成果を出さなければならないのです。ですから、会社は成果主義であって当たり前なのです。成果を出すために試行錯誤し、努力して、結果につながるいいプロセスを導き出すのが仕事というものです。

たとえば、地面に穴を掘るために、つるはしを持った 10 人の作業員を集めてくるか、一人に一台の電動ハンマードリルを用意するか、もしくはショベルカーを調達してくるかによって作業効率もかかる日数も違ってきます。

つるはしを何人に持たせようが、ショベルカー一台用意したほうが成果を上げられるのは目に見えています。だから成果を出せる人というのは、つるはしを電動ハンマードリルにできないか、よしんばショベルカーを調達できないか、あるいはもっと他によい工具や方法はないかと考え工夫するのです。これこそが「プロセス」というものではないでしょうか。ただ一生懸命インプットしているだけの人。頭を使ってアウトプットしている人。正しいのはどちらでしょうか。考えるまでもありません。仕事はアウトプットがなければ何も始まりません。したがって、「成果は出せなかったけれど遅くまで残業してよく頑張った」といった評価基準が入り込む余地をつくってしまうのは間違っています。

ただ一方で、100 個売ったら 100 の給料がもらえるけれど、1 個も売らなければゼロになる、といった極端な方向へいってしまうのも、正しくありません。ゼロか 100 かという話ではなく、大事なことは、「一定レベル以上に成果を上げた人が正当に評価されるシステムがある」ということです。

そこがブレてはいけないのです。もし、社員として十分な成果を上げて会社に貢献しても、それに対して相応の評価をしてもらえないのであれば、それは「会社を辞めなさい」といわれているのと同じです。正しく評価されない会社に勤め続ける必要はありません。仕事とは結果がすべてであり、その結果を出すためには正しいプロセスが絶対に必要なのです。プロセスが正しければ結果を出せるし、結果が出たのならそのプロセスは正しかったということになります。休日返上で仕事をしてへとへとになって「一生懸命仕事をした」と満足するのが仕事ができない社員で、頭を使って工夫をしたすえに結果を出して初めて達成感を得るのが仕事ができる社員なのです。

カッコ内を埋めてください

休日返上で仕事をしてへとへとになって「一生懸命仕事をした」と満足するのが仕事()で、頭を使って工夫をしたすえに結果を出して初めて達成感を得るのが仕事()なのです。